

# 騒がしい学級における学習規律の指導

—— 小2 新任講師の授業実態と助言 ——

栞原 昭徳

Teaching of “Learning Rules” in Abnormal Class

—— An Actual Condition of Lesson by Newly-appointed Teacher and My Advice ——

KUWAHARA Akinori

(Received July 20, 2006)

キーワード：新任教師、学習規律、研修

## 1. 新任講師授業の参観までに

本論文は、4年制大学の教員養成コースを卒業して、初めて教師となって教壇に立ちはじめた一人の新任講師の教室と校長室が舞台となる。

瀬戸内海沿岸のA市立B小学校の低学年の授業を参観して、その直後に、授業をした教師に対して指導助言をしてほしいとの依頼に対応することにした。それは、1学期の終業式まで、あと4日の登校日を残す時点でのことであった。その日にいたるまでに、A市教育委員会の学校教育担当課長から次のような連絡を受けていた。

2006年6月20日、電話を受けた研究室の学生によるメモには、次のように記されていた。

6/20 A市教育委員会の課長、N先生より電話。

「A市の教員に授業の指導をお願いできないでしょうか」とのこと。

7月中、2学期に授業を参観のうえ、指導をお願いしたい。(以下略)」

この電話連絡を受けた直後に、私の方からはスケジュールさえ空いていけば行くということ伝えた。結局は、1学期もおしつまった7月13日に授業を参観することになった。そのような経過を経て、2006年6月30日付の「A市採用教員の指導について」という文書名で、以下の書類がFAXで送信されてきた。この文書の中に示されている「A市採用教員」とは、一般に公立小学校等で採用している正規採用教員（県費採用）ではなくて、A市が独自に採用した「市費負担教員」のことである。(注1)

### A市立B小学校校内研修実施計画（案）

#### 1 日時

平成18年7月13日（木）、午前9時35分から午後0時20分まで。

#### 2 指導・助言者

山口大学 栞原昭徳 教授

## 3 研修対象者

〇〇 〇〇 教諭

## 4 日程

研究授業 9:35~10:20、国語科(2校時)、単独指導

指導・助言 10:40~11:40

・授業の改善点について

・学習規律と今後の指導方法について

出席者、市教委管理職等

その日、私は9時前にはA小学校に到着して、校長先生よりこれまでの経過の報告を受けた。休憩時間には、授業を公開し、つづいて研修を受けることになる新任講師の先生に校長室に来てもらって、本日の授業参観の目的を伝えることにした。私の方からは、「今日は、あなたの授業を見て、困っていることを助言するために来ました。どうか、いつものように楽な気持ちで授業をしてください」とお願いした。

## 2. 授業の参観までに

参観する授業は9時35分に始まる。授業が始まるまでの様子も見ておきたいものと思って、9時30分には校長室を出て教室へ向かった。

2年生の教室に入って、時計を見ると9時34分であった。教室に入って、最初に直感したのは、次のことであった。

①教室の机と椅子が乱雑な感じで配置されている。秩序感がない。

②教室の前の黒板や教卓から、いちばん後ろの列の子どもまでの距離が遠すぎて、疎遠な感じがする。

まず感じたのは、この2点である。さらに、気付いたのは次のことである。

③子どもたちが学校の授業に関係のない遊び道具を教室に持ち込んでいること。

1時限と2時限の間の10分間の休憩時間である。だから、勉強以外の何をしていてもかまわないのであるが、なにやら教室内は騒々しい。よく見ると、7名ばかりの男児が賑やかにトランプ遊びに興じている。どうやら活動的な男児7人ばかりが賑やかに、ババヌキを楽しんでいる。そのほかの2~3人は折り紙をしている。5~6人の子どもは、それぞれ自分の机で「お絵描き」している。トランプ、折り紙、お絵描き用ノートなど、平素の学校での主要な活動である授業に関係のない、どちらかといえば学校では不要なものが教室に持ち込まれて、教室の雰囲気を粗野なものにしているようにも見えた。これも、子どもたちが自分勝手に気ままな動きをする原因の一つではないかと思われる。

④休憩時間なのに窓のカーテンが閉められていて、教室が暗い。さらに、カーテンが風を含んで大きく揺れている。

教師は教卓の前に立っていて「そろそろチャイムが鳴るから、お茶飲むのは今の内よ」と注意を与えている。

筆者の入室から4分後の9時38分、授業始まりのチャイムが鳴る。

日直の児童2名が教室の前に出て、授業始まりの挨拶をリードしようとするが、日直も他の子どもたちも、授業始まりの活動に習熟していない様子で、スムーズに授業を始めることができない。

この時点で、そのほかに、次のようなことに気付いた。

- ⑤子どもたち自身が授業始まりの時刻を意識していない。
- ⑥授業が始まるまでに机の上に学習用具を出すこと（学習準備）ができていない。
- ⑦着席したときの姿勢が崩れている。ざわざわした感じ。
- ⑧教師が全員の子どもを意識して話をしていない様子。
- ⑨子どもたちが教師の方を向いて話を聞いていない。
- ⑩子どもたちの机の上の消しゴムや鉛筆が、たびたび床の上に落ちる。
- ⑪事務机・教卓・オルガン・配膳台が、教師と子どもを隔てるバリケードになっている。

2年生の学級の子どもたちは19名、題材は国語教科書の単元「かん字の書き方に気をつけよう」である。その中でも、本時の目標は「漢字の画数について知り、正しい筆順と画数で書く練習をすることができる」である。それを受けて、子どもたちにしめすことになる「めあて」は「かん字の「画数」についてべんきょうしよう」である。だから、子どもたちが利き手を上げて、教師と一緒に「1、2、3」と声を出しながら漢字の書き順を確かめたり、問題にする漢字が何画でできているかなどを自分で考えたりと、活動的な学習が展開される授業になると予想した。

ところが、チャイムが鳴ったあと日直は子どもたちの前に出ているのだが、なかなか授業開始の挨拶をすることができない。日直の仕事に習熟していないのである。

多くの子どもたちの着席の姿勢も崩れていて、ざわざわとした感じを与えている。教師の話を聞いている子どもも少ない。教師の問いかけに対して、挙手する子どもの人数は少なく、しかも限られた子どもである。学習プリントも2枚ほど準備されているものの、子どもたちの学習は、遅々として進みそうにない。

学習プリントには、草、花、糸、毎、計の5文字を、実際に書いてみて、画数を記入するという問題も設定してあった。各自で考えたあと、子どもたちの中の5人が黒板に画数を書くのであるが、だれが書くかを決めるときに、一つの問題が持ち上がった。教師は、黒板の左手隅に置いてあった子どもの名札を5枚ほど選んで、黒板のそれぞれの問題のところに貼ったのである。それに対して男子児童から「女子ばかりじゃ」「なんで（自分に）当ててくれんの」とか、はては「チクショウ」などの不満の声が上がった。一部の男児の学習への旺盛な気持ちが正当に発揮されず、逆に学級の学習の雰囲気マイナスのものにしているのがあった。

10時22分、定刻をやや過ぎて、授業は終わった。

### 3. 校長室での指導と助言

10時30分、講師の先生が校長室に来られて、すぐに話し合いが始まった。

#### a. 「ここに座ってください」

授業を参観したあと、校長室で話し合いながら、乗原からの指導助言を行うことにした。講師の先生に乗原の話を真正面に受け止めてもらうという意味合いもこめて、校長室の大きな机をはさんで私の真ん前に座ってもらうことにした。また、右手には学校長が、左手にはA市教育委員会の学校教育担当係長と指導主事が着席することになった。

「私の勉強のために録音は取りますが、あなたのマイナスになるようなことは絶対しませんからね」と録音することの了解も求めた。

以下、できるだけ実際の指導助言の雰囲気伝えるために、録音をもとにした話し言葉での記述にする。

いろいろなことを話したいのですが、とにかく（あなたの授業改善のために必要な）最低限、必要なことを話しますからね。

### b. 栗原の自己紹介

私は、今度8月が来ると61歳になります。26歳のときから小学校の教員は9年間しました。小学校では1年から6年までの学級担任をしたことがあります。その後、大学に行っても、たくさんの現場の幼稚園・保育所の保育や小中学校の先生の授業を見ます。ですから、今日のあなたの授業を見ても、あなたが良くないとか、あなたがいけないということをおもうとは思いません。教壇に立つ構えだとか、大学で勉強したこととか、そんなことには問題があるかもしれませんが、あなたの人格に問題があるということではないのです。ときには厳しく言うことになるかもしれません。

### c. 学年始めの簡単な指導ができていない

要するにあなたが困っていることは、じつは簡単なことなのです。ほんとに、いくつかのことを、学年の初めにちょっとでも言ってもらっていたら、ここまではならなかったでしょうね。そう思ったほうがいいのです。そのことは、ほんの今、ここにおられる3人の先生方に言いました。

また、あなたが初めて教壇に立ったということも知っています。あらかじめ教えてもらいましたから。最低限のことができていないのです。そのいくつかのことを言いますからね。（講師の先生「はい」）それから行きましょう、ぼちぼち。

今日の授業で、あなたが一番困ったことは何ですか。

（講師の先生、あらかじめ紙に書きだしておられた「授業の中で集中することの難しい3人の児童のこと」を説明される。）

先生が紙に書きだしておられたM君たち3人のことですが、廊下側の後ろのK君、そしてM<sub>2</sub>君の3人ですか。（筆者の見当とはちがって、じつはS君とのこと。）S君は、今日、目立ちませんでしたね。（講師の先生「いつもは騒がしいのですが」）つまりね、今日のように外部から人が来ているときには、ちゃんと良くする子どもですね。しかし、Mくんは、素直だから、いつものようにやるのです。だから、一番目立つのです。

うしろで参観していて、私は、M君の隣の女の子の右隣の席の男児の方が気になりましたね。廊下側の席の外から3番目の男児が気になりましたが、その子はどうもないですか。私は、その子と、M君との3人が、気になる子かと思いました。

とくに前の席の男児ですが、今日は目立たないというのは、考えている子どもです。頭が働くから、今日はしないのです。

一見するとM君が授業を妨害しているように見えますが、じつはM君は、ほとんど勉強のことで騒いでいるのです。たとえば、挙手して「あててくれ（指名してくれ）」とか、「女子しかあてない」とか、「漢字のここが、くっついている、あるいは離れている」とか言っていましたが、まちががなく学習内容に関係のあることを言っているのです。この子は、学習内容から逸脱していないのです。

ということで、今の先生がいちばん頑張らなくてはならないのは、あの子たちにとって

「やりがいのある授業」にするという点です。これが結論です。

#### d. 時計を気にする子どもに

そして、今日は授業の中で、子どもは1度もノートや教科書を開かなかったですね。

学習の準備に関して、チャイムが鳴る前に、あなたがたくさんのことを言っているのですね。「もう何分したらチャイムが鳴る」とか、「チャイムが鳴ったらこうしなさい」と言っているけど、子どもたちは、ぜんぜん時計を気にしていないのです。

先生は気にしているけど、子どもが時間や時刻を気にしてくれないと意味がないのです。

ということは、学年始めあたりに「あっ、あの時計はチャイムよりも、何分早いとか、遅い」とか、あるいは「今日はチャイムと同時に授業が始まったね、えらいねえ」とか、「日直さん、時計をよく見ていたね」などの言葉を、教師が言わなくてはならないのです。「いま、何時何分か、あと何秒で授業始まりのチャイムが鳴る」とか、あるいは教師が「20秒で、教科書が出せたね」とか、教師の方が言うと、子どもたちも時間や時刻を意識するのです。今日の授業を見るかぎり、時間や時刻について、教師が言ってないし、気にしていないですね。

あの時計は、チャイムと合っていますか、それとも何分くらい違っていましたか。

たとえば、2校時の始まりは9時35分ですね。9時35分にチャイムが鳴ったときに、あの時計は、たしか9時38分を示していたと思います。つまり、先生であるあなたも授業始まりの時刻を意識していないということです。教師が意識していないのですから、子どもたちが意識することはないのです。

だから、わざわざ子どもたちのいる目の前で、時計を合わせてみるとか、秒針まで合わせておくからねとか、チャイムが鳴りはじめたときに秒針があっているかどうかを見るのは難しいから、鳴りおわったときに秒針が0にくるように合わせておこうねなどと、子どもたちの前で先生がやって見せるのです。

すると、子どもたちは授業始まりの時間を意識するし、「あと何分で、授業が始まる」というようなことを言い始めるのです。

そうして子どもたちが時刻を意識してくれると、トランプをやめなさいとか、折り紙をしまつてとか、お絵かき帳を机の中に入れてなどと、教師が言わなくてすむわけです。

つまり、学級の子どもたちが自分たちの力で自動的に取り組める部分を、いかにして多くするかということなのです。時間や時刻を、先生が気にして、子どもと一っしょにチャイムとともに授業が始まることを喜んだり、君たちは「実力があるね」というようなことを言わなくてはならないのですね。

#### e. 日直の仕事を練習しよう

学級の中に日直がつくってあるということは大事なことです。これは、大学で習いましたか。大学のO先生に習ったでしょう。O先生は、私の大学時代の先輩ですからね。素晴らしい実践家であり、大学の先生なのですよ。あなたの先生は立派なのですよ。つまり、日直というのは学級の自主管理の組織であるというのを習ったでしょう。これが、学級の中にあるということは、とても大切なことです。

ただし、日直がみんなの前に立ったのは、チャイムが鳴ったあとでした。もし、時計を見ながら「あと、何分でチャイムが鳴る」といって、日直の自分の力でみんなの前に立つ

ていたら、30秒前になったら、みんなの前に立って、チャイムが鳴り始めると同時に「きりつ、しせい、いまから国語の勉強を始めます。れい」と言ったとします。そうしたら、先生も「チャイムが鳴り終わって、10秒で、もう授業が始まるね。すごいよ。今日の日直さんは、実力があるよ」と誉めることができます。

日直というのは、一つの授業で始まりと終わりがありますから、一つの授業でかならず2回ほど活動します。1日に5時間の授業があるとして、朝の会と終わりの会にも初めと終わりがありますから、確実に1日10回以上は日直の仕事があります。今日は、1学期の70日目くらいだと思いますが、学年始めから換算すると、700回くらいの練習をしてきたはずですよ。

700回も活動してきているのなら、授業の始め方と終わり方については、上手になっていなくてはならないのです。

だから、学習内容というのは、その日の授業で初めて出会うことが多いので、分からないことや出来ないことがあってもいいのですが、授業の初めと終わりは700回ほど練習してきたことですから、もう上手にできていなくてはならないのです。そのことを、教師が指導していないのです。

教育というのは、自然現象ではありません。先生が指導してきたか、指導しなかったかの問題なのです。つまり、日直の仕事、日直の活動の仕方も教える、練習するということです。

#### f. 学習の準備

日直が授業始まりの挨拶をするまでに、子どもの教科書やノートが机の上に乗っていません。つまり、学習の準備や、学習への態勢（身構え・物構え・心構え）ができていないということです。

それも教師からの指示「教科書を開きなさい」「ノートを開きなさい」というのではなくて、班やグループの活動として、あるいはその子どもの「実力」として活動ができることが大切です。

そのノートには、授業の最初に、国語なら、かならず「七月十三日」というように書いて、今日の勉強の題名「かん字の書きじゅん」とか、「かん字のべんきょう」というのを書くようにします。そして、教科書を開いて、ノートの上において、姿勢を整えたときに、チャイムが鳴って、その直後に先生が「教科書の〇〇ページを読んでごらん」といって、授業が始まるといいのです。そのような授業の始まり方が学習準備なのです。

#### g. 教師と子どもとの間の距離とバリケード

あの教室では、勉強するのに一番大事な黒板と、一番うしろの列の子どもとの間の距離が遠いのです。勉強するときの教室というのは、どちらかというと、なるべく黒板と先生を中心として凝集力があるほうが良いのです。近いほうが良いのです、とくにうしろのほうの子どもにとっては。この子たちが、気持ちの上で騒いだり、妨害をするというのは、板書と先生から遠いから騒ぐということもあるのです。

これは大学生でも同じことが言えます。

私は150人規模の講義を、それも月曜日の第1時限目の8時40分からすることもありま

すが、大学の講義であっても教師と学生たちとの距離が問題になってくるのです。

大きな教室での講義では、後ろのドアから遅刻して入ってきて後部の席に座り、講義が終われば後ろから出て行く学生がいます。その学生たちの中には、教師からの距離が20m以上近くなるということはない人もいます。こんなに教師との距離が遠いと、講義内容にも近づいていないのです。講義内容との距離も遠くなり、講義内容とも疎遠になるのです。

ところが、私の講義では、毎回準備する講義の要項や資料は、学生が一人一人私のところまで来て、受け取らなくてはならないのです。少なくとも、50cm以内に近づくことになります。このように教師と学生の間の距離が近くなると、顔と顔を見合わせ、対面しなくてはならなくなります。

すると、朝、教室にやってきて私のところへ講義要項をとりに来る学生の口から「おはようございます」とか、「ありがとうございます」とかの挨拶の言葉が出ることになるのです。講義の終わりにミニレポートを出すことにしていますが、そのきにも教師と学生の距離は50cm以内になります。そうすると、今度は「ありがとうございました」とか、「お世話になりました」などの言葉が学生の側から出てきます。

それほどに、子どもや学生と教師の間の距離は重要な事柄なのです。

結局、授業の開始される学年始まりの時期に、大きく授業参加のための仕掛けがしてあれば、この1学期終わりの時期になれば、教師が大きな声で授業の参加の仕方について言う必要はなくなるのです。

今日の2年生の教室でいえば、いちばん後ろのあの子どもたちと教師の間の距離が遠いから、子どもたちも疎遠になるし、つまらないことでも、言ってはならないことでも平気で言えるのです。先生と気持ちの上で近かったならば、あんなことは言えないのです。ということで、なるべく教室内の子どもたちの机を、黒板と教師の側に近くすることです。

#### h. 縦横をそろえて机の整頓を

今日、教室に入って驚いたことは、机の配置が乱雑なのです。縦横が揃っていないのです。それも、教室の床の上に印を付けていいのかどうか、私は分かりませんが、同じ間隔で揃うようにすることです。先生の方側に向けるために、教室の縦横に対して斜めに机が配置されていますが、この斜めに置く机をそろえるというのは、2年生の子どもたちにとっては、難しいのです。教室での着席の姿勢が崩れたり、姿勢が良くなかったり、崩れた雰囲気のあるときには、ほとんど机の縦横が崩れているのです。

2年生や3年生の困った学級で、私自身が授業をすることがあります。そのときに、まず何をするかという、教室の机のたてと横をそろえる仕事なのです。

「あのね、机の列が曲がっているからまっすぐするよ。縦ができたなら、横もね」などと言いながら、私も机を動かしたり、いっしょにまっすぐにしたりするのです。すると、子どもたちもやります。そうすると、学級の雰囲気まで秩序正しくなるのです。不思議なくらいです。小学校くらいの子供たちは、人間がもともと持っている秩序感覚みたいなものがあるように思えてなりません。

子どもたちの様子を見てみると、気持ちよくなった感じで、姿勢まで良くなるのです。まず、こんなことも取り組んでみてください。

私は、あなたの授業が終わったあと、たまたま1年生の教室の廊下を通りました。1年生の教室の机は、真横から見ると、ぴたっと揃っています。こういうことができている学

級は、おそらく崩れていないはずですが。実態は知りませんが、おそらく大丈夫な学級だと思えます。つまり、授業への構えや雰囲気ですね。

そしてカーテンあたりも、今日あたりは閉めるのがよいのか、開けるのがよいのか難しいところですが、風が吹いていて、カーテンがふわふわと動きますね。このように周囲のものが動いていると、子どもたちの気持ちも揺れるのです。だから、学校での教師は、ふわふわと動くものや、ゆらゆらと揺れるものは、あまり身につけないのです。

### i. 教師の服装・髪・言葉

ついでにですが、今日のあなたの服装ですが、白っぽい服装ですから、黒板の前において仕事をする教師としてはふさわしい色の服装です。

黒板というのは、黒いですね。いくら流行しているからといっても、教室での教師が黒い服装をしていたら、目立ちませんから、子どもたちから見れば注目しづらいのです。

だから、授業のベテランの先生方は、とりわけ低学年の先生方は、学年の初めに子どもたちと出会うときには、白っぽい色や薄いピンクの服装を心がけておられるようです。

そしてね、顔に近い胸のあたりに、大きくて目立ちやすいブローチなどをしておられます。そうすると、子どもたちは、注目しやすいですね。ベテランの先生というのは、そういう工夫もしておられるのです。

そしてね、つまらないことですが、言わせてくださいね。

教室で最初にあなたの顔を見たとき、髪で顔の一部が隠れていました。顔の輪郭の全部が子どもから見えないということは、子どもからいえば、見なくてもよい存在になってしまうのです。子どもの前で、自分という存在をアピールできるためには、はっきりとした目鼻立ちで子どもの前に立ち、物を言うときにも、きちんと言わなくてはならないのです。

また、教師が子どもに話をするときの基本は、子どもたちの前に立つときには、少し足を開いて立つと、安定します。ふらふらしないですみます。そして、手は、横か、後ろか、机につくかして、目はみんなを見て話すのです。

目は、だいたい真正面の子どもの顔を見て、右手の気になるA君の顔を見て、左手の、もう一人の気になるB君の顔を見ると、ほとんどの子どもを見ることになります。また、真ん中の子どもの頭よりも少し高いところに焦点を定めて子どもたちを見ると、全員の子どもを見ているような視線になるようです。

そして、はっきりとした発音と口調で物を言うことです。今日のあなたの発音や言葉遣いは、まだ学生のもの言い方が残っている感じです。先生らしい、はっきりとした口調で、無駄な言葉は使わず、短く、きちんと指示をすることです。

### j. 黒板での子どもの説明

それと、子どもを黒板のところに出させて、説明をさせましたね。これは、とても良い教え方です。今日は原理原則まで話す時間はないのですが、「活動を通して」、つまり子どもが自分の身体の動きを通して、生き活きと動きながら（それは「活動」という熟語の訓読みでもあるのですが）、そして「体験を通して」勉強する（学習する）というのが21世紀の学習方法なのです。黒板のところ子どもを出させて勉強進めるといのは、とても良い方法なのです。

ただ、一つ問題なのは、今日の教室の状態では、子どもたちが黒板のところに出づら



ですね。向かって左から、先生用の事務机が置いてあって、その横に教卓とオルガンがあって、その横に給食のときに使う配膳台が置いてあったでしょう。つまり、この大きな4つのものが、子どもたちと先生を隔てるバリエードの役をしているのです。

#### k. 教師集団としての研修のあり方

本当は、このような基本的な教室の教卓や教師用机、子どもの机の配置の仕方などは、この学校の先輩の先生方に言ってもらわないといけないのです。1学期も終わろうとするこの時期に、新任の先生の教室の配置がうまくいっていないというのは、ほかの先生方に責任があると思います。

なにしろ、あなたは新しい先生ですから。そういうことを教え合うというのが、教師集団としてのあるべき姿なのです。そういう形で、あなたの教室の子ども用机や教師用机、教卓などの配置があのまま放置されていたというのは、あなたにとっては気の毒な職場だと思います。

しかし、そうは言っても、あなた自身が自分の力でできたらいいことですからね。

#### l. 全員の子どもを参加させるために

そして、あなたが「一、二、三、・・・」と声を出しながら、漢字の書き順を子どもたちに手を上げさせて、練習させましたね。あのような身体を動かして行なう学習というのは、子どもたちからみれば、とても参加しやすい学習方法なのです。

せっかくの方法ですが、教師が背中を見せながらおこなう学習になるものですから、実際には、きちんと手を動かしていない子どもがたくさんいるのです。

あなたが気になると言った子どもたちは、比較的よく取り組んでいました。ほかの子どもたちの中に、たくさん取り組んでいない子どもがいました。

だから、低学年の先生は、書き順を教えるときには、子どもの方を向いて、教師から見れば反対の書き順をしなくてはならないのです。そういう練習をあらかじめしておかなくてはならないのです。鏡を使って練習をするとよいかもしれません。それが、プロの教師の準備（教材研究）なのです。子どもにも、保護者にもできないことを、教師は当たり前のようにしなくてはならないのです。

つまり、子どもからみれば、参加しなくてもかまわないような、指導の形になっているということです。

そして、実際に黒板に書くときに、子どもといっしょに大きな声を出しながら「一、二、三、・・・」と大きく板書しておいて、そのあと子どもたちには黒板の大きな文字をなぞってもらって、先生は子どもたちの手の動きを見ておればよいのです。

#### m. 誉め方（評価）のコツ

そうすると、「A君は、ほんとうに字を書いているような力の入れ方で、角のところをきちんと曲げて書いているね」というような誉め方ができるのです。

先生が、授業の中で「姿勢が良い」とほめていましたが、それも大事ですが、最終的には本時の学習内容で誉めることができる、いちばん良いのです。

「B君は、下に伸ばすときに、きちんと伸ばしていた」あるいは「止めていた」というように誉めようとすれば、先生がきちんと見ておかなくてはならないのです。そういう誉め

方でないと、子どもは本気でがんばることはできません。

たとえば、あなたの授業で出てきた「草」という字であれば、5画目の角は、ゆっくりと力を入れて書いているのでいいよと、ほめることができます。

一番いけないのは、全部良いとか、全体に三重丸、五重丸をつける評価の仕方です。

今日の先生の授業の中で、気になる子どもの一人のM君が、ちょうど私の目の前にいたので、プリントを見てやりました。「計」という字の「ごんべん（言遍）」の中の「口」の2画目の角がきちんとできていました。そこで、私は持っていた青のボールペンで小さく囲みながら「これはいいぞ」と言いました。よく見ると、「計」の字の最後の画の伸ばしもうまくできていたので、「これも、いい」と誉めました。さらに「草」の1画目の「一」の止めも「これもいいなあ」と言ったら、すぐに「先生、丸をつけて」と意思表示をしました。もちろん、小さかったのですが、青丸をつけてやりました。

M君は、ほんとうは学習の内容や活動からは逸脱していないのです。学習内容の範囲内でがんばっているけど、あえて言えば勉強への参加の仕方逸脱しているということになるのでしょうか。

つまり、誉め方のコツは、これなのです。これは「五重丸」とか、全体として「花丸」というようなほめかたが、いちばん良くないのです。この線の伸ばし方が良い、曲げ方が良い、止め方が良い、はらい方が良いというように、具体的な誉め方をしなくてはならないのです。小さい部分、本当にがんばったところを誉めるとよいのです。そういう誉め方を心がけてください。

姿勢が良いとか、悪いというのは、1学期の最初のころには必要となる評価の仕方ですが、この時期になったら、もう卒業しなくてははいけません。なぜかという、1学期ももうすぐ終わろうとする時期だからです。でも、学年の初めのころは大事な誉め方（評価）なのです。

#### n. ノートを中心とした国語科の経営を

今日の授業で配布したプリントは、ノートの中に、どう位置づくのでしょうか。この大きさのプリントでは、そのままノートに貼ることはできません。

だからプリントも、半分のところで切れるように、点線だとか、あいだを空けておくとかの工夫をして、あとではさみで切って、糊づけするというのも大事な勉強なのです。

あくまでも勉強の中心をノートにおくと、子どもは宿題をしたり、発展的な勉強ができるのです。まずね、子どもが取り組んでみたくなるような仕事を、いかにして教師が作るかということなのです。

はさみで切って、あるいは何度か折り曲げて両手できるというのも、生活技術の一つです。そして、少しの糊を使って、ノートにはる。そして、ノートの片面は空けておいて、自分が勉強するところとして使う。漢字の練習をするとかね。つまり、子どもがやりがいのある勉強、仕事を作ってやるということです。そして、子どもたちのエネルギーをその仕事に向けてやるということです。すると、とくに喧嘩だとか、言い争いはすぐなくなります。(高知県、足摺岬の1・2年生の事例。省略)

#### o. 子どもの誉め方（評価）の事例

あなたに準備した冊子『子どもの学習力』（注2）の16ページを開いてください。「ショ



す。研究室から学校へ送りました。(上記のFAXコピーを参照のこと)

私は「宿題を忘れないで、よくやったね」と誉めています。多くの先生は、子どもが宿題をするのは当たり前だと思って、宿題をしたという事実を、あまり誉めないのです。「宿題を忘れないでよくやったね、えらい。あなたは」というように、これをまずしなくてはなりません。「そのうえ、ていねいに書きましたね」と誉めるのです。

そして、その次の数字の書き方をほめることが大事なのです。

そういうことを、教師は見抜かなくてはならないのです。たとえば、「0 (ゼロ)」の書き方は、上から左側に下ろして、右側に上がって、元のところに戻る。これに対して「〇 (まる)」の書き方は、下から書きはじめて、左側に上げて、真上にきて、真上から右下に下がって、本の真下につなげます。ショウマ君の0 (ゼロ) は、すべて基準が正しくかけていることが分かります。「4も字の形が良いですね」「7も最後の棒まで、きちんと止めてありますね」と誉めています。これが、子どもを誉めるということなのです。

だから、今もショウマ君と私は仲良しです。雨の降ったある日、私は校長先生と、ショウマ君のいる分校に行きました。私の服に雨粒があるのを見つけたショウマ君は、私の方の雨粒を自分の手で払いのけてくれました。校長先生の方ではありませんでした。それほど、仲良しなのです。きっとショウマ君のがんばったところを誉めたからでしょう。

本当に子どもが努力したことを誉めてやらなくてはならないということです。

そのことは、今日のあなたの授業でいえば、M君の「計」という字の「口の曲げ」や「十」の「伸ばし」、そして「草」の第1画の「一」の「止め」を誉めたことと同じです。彼は初めて出会う私に「丸をつけてくれ」と言いました。一見すると困った存在のM君ですが、じつは授業の内容からは、まったく逸脱していないのです。

そのうえ、彼は、今日みたいに校長先生や教育委員会の方が来ても、いつもと同じように行動してくれて、見方によれば、素直な良い子ですよ。

そのあと、私は「君、座り方なんかも気をつけたら、もっと良いよ」と言ったのですが、途中から姿勢が良かったはずですよ。

#### p. 着席の姿勢の指導

ちょっと付け加えますが、勉強をするときの子どもたちの「姿勢」も、教師の指導のうちです。ときに私が小学校2・3年生に対して授業をするとき、目の前の子どもたちに姿勢を良くしてもらいたいときに、かならず言うことにしている言葉があります。

ふつう、多くの先生は「姿勢を良くしなさい」と言うでしょうね。それでもいいのですが、私は「自分が、いちばん良い姿勢だと思う姿勢をしてごらん」といいます。そうすると、子どもたちの姿勢は、良くなります。というのは、自分が考えてみて、いちばん良い姿勢を選び取れるからです。

すると、何人かの子どもが、あまりにも頑張りすぎて、お腹と机のあいだをつめすぎて、窮屈な状態で座るのです。そんな子どもには、「良い姿勢だよ。だけど、あんまり椅子を前に出しすぎると苦しいから、げんこつ(拳骨)が一つ入るくらい、椅子を後ろに下げて」と座り方を教えてやります。

つまり、いつも「あしなさい、こうしなさい」という代わりに、自分の頭で考えて、選び取らせるような活動を、いかにたくさん準備するかということなのです。

そして、ノートやプリントに書くときには、鉛筆の持ち方も実力の内です。授業の中で、

教師は「〇〇さんの鉛筆の持ち方はいいね」「左手も上手に使っているね（プリントの上に置いているね）」。

今日の授業の中で、先生は「左手」の置き方のことを指導していましたね。このとき、きちんと出来ている子どもの「左手」を誉めればよいのです。そうすると、ほかの18人にも「左手はプリントの上に置きなさい」と間接的に言っていることになるのです。それは「誉めることを通して」間接的に指導しているということです。

いま、一気に、いくつかのことを言いましたが、基本的には、そんなことでしょうかね。

#### q. 「チクショウ」はやる気の言葉

そうそう、あなたが黒板に子どもたちの名札を置いて、指名の代わりに黒板での作業をさせましたね。すると、子どもたちの中から、口々に「女ばかりじゃ」とか「ちくしょう」と激しい言葉まで使っていましたね。これは、「なんで自分に当てて（指名して）くれないのか」と言っているのです。これは、その勉強は自分でしたいという気持ちが、少々荒っぽい言葉で表現されたものです。やる気の表現なのです。

だから、この場面の勉強の仕方を変えなくてはならないのです。「ほかの人は、ノートに書いてください。先生が見てまわりますからね」と言って、赤ペンをもって、机間指導をすればよいのです。そのあいだに、子どもたちの「細部の良さ」を見つけて、大いに誉めればよいのです。「きみは、このごろ良く勉強するようになったね」などと、その子にふさわしい誉め方をすることです。

そのとき、「教師の赤ペン」というのは、たいへんな威力があるのです。

黒板に書くことができるのは、5人か6人ですから、あとの12、3人は当たりません。その子たちにも、やりがいのある活動を準備しなくてはならないのです。机間指導の中で、たとえば、「この字の角のところが、とくに良い」などと、ほかの子どもに聞こえるような大きな声で言えばよいのです。これは「二重丸」とかね。そうすると、たとえ黒板で書く仕事にはあたらなくても、ほかの形の仕事でがんばれるのです。

今の方法ですと、黒板のところに出ている子どもしか、がんばったことにはなりません。そういうときのためにも、ノートがいつも使える状態にしておかなくてはならないのです。

#### r. ノートに番号をつける

冊子『子ども学習力』24・25ページ（注3）を見てください。学年始めに、国語や算数のノート子どもたちに渡すのですが、クラスのみんなで同じ規格のノートを使うことにします。そして、そのノートの表紙に、自分の名前を書くとともに、「だい1ごう」とか「No.1」とかの文字も書き込むのです。つまり、算数や国語のノートは、何冊使ってもかまわないということです。自分で、どんどん勉強してもよいというメッセージが込められたノートなのです。

私の経験では、80%の子どもたちが、ノートに番号をつけるだけで、自分の力だけで勉強をしはじめます。中には、小学校2年生でも「ノートを全部あわすと23冊です」と書いてくるような子どもも現れます。高学年では1週間で1冊使う子どもも出てきます。

#### s. 学級通信、発行のコツ

あなたは学級通信を出していますか。（講師「出しています」）そしたら、学級通信を出

すときのコツも、話しておきましょう。

(と言いながらも、当日には話すのを忘れてしまうことに。以下は加筆。)

私は9年間の学級担任をするうちに、1100号から1200号くらいの学級通信を出したはず  
です。年平均、130号くらいになるでしょうか。その体験を経たうえでの結論が次の「学  
級通信の発行、3つのコツ」結論です。

ア. 子ども向けに発行する

学級通信は強力な教育の手段である。子どもが読める表現と内容で。

子どもが読めると、大人（保護者、家族）も読む。

イ. その日のうちに発行する

「新聞」を「旧聞」にしない。新鮮なニュース、話題であること。

小学校1・2年生は、手書きで15行程度でよい。終わりの会、家族の前で読む。

ウ. 授業も記事として取り上げる

授業は学校で最も重要な活動である。授業中の子どもの活動を気にする。

授業への参加の仕方、「発見」の仕方、上手な勉強の仕方の典型をしめす。

t. 子どもを勉強好きにするのも先生の仕事

子どもたちに、ノートや家庭学習についての作文を書いてももらったことがあります。子  
どもたちが自分の力でどんどん勉強することができ始めると、子どもたちの作文には数字  
がたくさん出てくるようになります。自分が勉強したノートのページ数や、勉強時間など  
を意識するようになるからです。

要は、子どもたちが勉強したくなるような仕組みや仕掛けを、教師が考え出すことです。  
仕掛けは先生が考えて、子どもたちが自分の力だけでどんどん進めることのできる部分を、  
いかに多くするかです。先生というのは、子どもたちを勉強を好きにさせる名人でなくて  
はいけないのです。子どもたちが勉強好きになるかどうかは、先生の力なのです。

(10時12分。約40分間話したところで前半を終了。休憩。)

u. 休憩時の会話から

栞原「なにか、ヒントになったかね」

講師「当たり前のことができていなかったなあと思います」

栞原「教育実習は、どこでやりましたか」

講師「大学の附属小で2週間ほどしました」

栞原「附属学校を持っている養成大学というのは、すごいことですよ」

栞原「授業は何時間くらいやらせてもらいましたか」

講師「1クラスに10人くらいの教生がいましたから、授業はやりませんでした」

栞原「1時間も？」

講師「はい」

栞原「それは、いけない。せっかくの附属小学校があるのにね。出身校での実習は？」

講師「ON小学校でしました」

v. そのほかの指導事項

指導助言の後半での話題は、スペースがないので、項目を挙げるにとどめる。

- 日直の仕事、授業の始め方、学習規律は、附属での実習でも習わない。
- 子どもたちの悪さをするエネルギーを、勉強に向けてやることです。
- 自分でしようとしないうる女児へは、教師だけでなく、クラスの他の子どもの力も借りる。
- サイコロを使った1年の自主学習の事例。子どもが自動的にすすめる学習方法。  
母親からの手紙「うれしかった。これは先生しかできない仕事だ」。
- ノートに番号をつけて、一番たくさん勉強した子どもは「41冊」。
- 栗原の父親の骨折した手のリハビリに学ぶ。かすかに動く指に少しずつ負荷をかける。
- 「ためしてガッテン」流の減量作戦に学ぶ。数値への着目。人間は「脳の生き物」。
- 学習規律には、学年の発達段階はない。あるのは、先生が指導したかどうかだけ。  
学習参加のためのルールやマナーも、指導のうち。
- どの授業でも、その時間の学習内容、独自の学習方法、共通の学習規律を指導すること。
- 子どもの家庭環境はどうあろうとも、学校で救わなくてはならない。  
ペスタロッチーの「シュタンツだより」の世界。  
「子どもたちは世界のことも、シュタンツ（の街）のことも忘れて、私とともにあった。」
- 教師が指名をして、子どもが発言する方法が原則。  
なぜ、私語的発言が続いているか。じつは、教師がルールを破っているのだ。
- 公立小学校5年生の山崎君のノート。授業中、みんながノートを見て、学ぶ。
- 大晴君の「カキホイク」、騒がしい学級の子どもたちの「工場」の読み方と意味。
- 学力には、①測定可能な内容学力、②方法学力、③規律学力の3つがある。

以上の指導助言の最後に、私は講師の先生に「学期末で、いそがしいことは知っているのだが、今日あなたが学んだことの中で、大事だと思うことを3つほど箇条書きにしてください。そんなに時間をかけないで書いて、FAXで送ってください」と頼んだ。

一人の新任講師のために、校長をはじめ教育委員会の係長、指導主事、そして筆者も加えた4人が半日を費やした仕事である。この先生が何を学んでくれたのか。やはり、それを知りたかったからであり、多大な経費のかかった仕事である。

#### 4. 新任講師の研修から全校研修へ

新任講師の研修を終えて6日後の7月19日、O市の学校教育担当課長より、ふたたび連絡が入った。このたびの新任研修を発案した方である。じつは、このN課長は、長い間、小学校実践の世界で生きてこられた方である。だからこそ、教師の研修にこだわりがある。

この夏休みの研修の一環として、さっそく7月28日午後に全校の教師に対する「授業指導の基礎基本」についての栗原の講演を位置づけたいとのことであった。じつに、新任講師の研修の15日後の全校研修である。

指名された私にも大きな責任があると考え、「わかる授業の基礎基本」を力の限り「わかりやすく」話してみたいと目論んでいる。

上記の全校研修の企画を伝える電話の直後に、N課長からは、新任講師からの約束の「研修のまとめ」がFAXで届いた。

##### <研修で学んだこと>

先日の研修では、お忙しい中、指導・助言をいただき、まことにありがとうございます

ました。多くのことを学ばせていただきました。

- ・教室内の配置について

教室内を子どもたちにとって、より親しみのある快適なものにしていけるように工夫・改善していこうと思います。

特に黒板前の配置を早期に改善していこうと思います。

- ・日直の仕事について

チャイムと同時に挨拶を始めることが出来るよう指導していきたいと思います。

- ・児童の学習意欲について

子どもたちが自ら意欲を持って学んでいくことが出来るよう、指導内容・方法を工夫していきたいと思います。

今回学ばせていただいたことを今後に生かしていきたいと思います。

上記のFAXを読んだ直後に、私のほうから、その学校の校長先生に電話を差し上げた。校長によれば、新任講師の先生は、その後たいへん頑張っておられて、表情も明るいとのことであった。ここ3日間は保護者へ通知票を渡すための個人懇談とのことで、学期末の仕事に専念されているとのことであった。

この学校でも、一人の新任講師だけではなくて、一つの学校の教師全員が、いち早く「生涯通用する授業指導力」を身につけるための研修が始まろうとしている。夏休みに入ってすぐの7月28日13時30分より16時まで、私はこの小学校の全教師に対して、「わかる授業の構造と指導方法」というテーマの講演を行なった。

## 注

(注1) 近年、国の教育特区構想の一つとして、従来の学級定員40名に対して、地方公共団体独自の構想で、たとえば小学校全学年を30名以下の学級編成としたり、低学年(1・2学年)のみ35名ないしは30名以下の学級編成とするような特例が認められている。

筆者が3年前に訪問したことのある長野県のある小学校では、全学年の児童数が40名以下であるにもかかわらず、各学年の全学級が2学級に編成してあった。その結果、学級担任の半数が県費ないしは市町村費等で負担する、いわゆる「講師」としての雇用であった。その学校の校長による説明の中の「どの学年にも、正規雇用以外の先生がいることになり、指導力(実践力)が心配だ」という意味の言葉が強く印象に残っている。

そのほかに、少人数指導担当教員、新任教師の研修時の代替教員、従来からの産休・育休代替教員など、現在、学校現場で授業を担当する教員の「パートタイム化」が進行している。

(注2) 乗原昭徳編著『子どもの学習力—新生児・乳幼児から小中学生まで—』(2004年7月2日発行)の2～7ページの写真を用いて、生後40分の新生児のオリエンテーション能力や、2歳児の真似をする能力を説明した。

(注3) 同上。